

# 函館大学講座

## 1 導入の背景

近年のグローバル化や、変化が著しいこの現代社会では、多様な人たちと一緒に、主体的に協働する力や柔軟に対応できる力などが不可欠になってきています。

文部科学省は教育機関に対し、これからの社会に適應できる人材やその資質の育成にむけて、学習者の能動的な参加を取り入れたアクティブ・ラーニングの必要性を説いており、すでに高等教育機関を始め、あらゆる教育機関にて導入が進んでいます。

## 2 教育の新たな流れ

近年、SDGsに関連した教育では、単純に国際関係や異文化を理解するだけではなく、国際社会の一員としてどのように生きていくかや、国籍等の異なる人々が、互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築くことしながら、

# ともに考え、共生を築くための教育環境を創る

## 多文化共生(第3回)



引用：文部科学省 持続可能な開発のための教育

## アクティブ・ラーニングによるアプローチ

地域社会の構成員として共に生きていくことなど、共に生きていくための知識・スキル・価値観の理解を深めるため



高橋和将専任講師 (たかはしかずまさ)  
東京都出身。星槎大学大学院教育学研究科修士課程修了 修士(教育学)。専任講師・地域連携センター長。商学実習や海外プロジェクト学習などを担当。  
(撮影：岩崎翔汰)

の教育が進んでいます。また2002年に我が国が提唱した国際的な教育における枠組みに、ESD (Education for Sustainable Development) の目標達成のために不可欠である質の高い教育の美

velopment: 持続可能な開発のための教育) があります。このESDは持続可能な社会の担い手を育成し、SDGsの目標達成のために不可欠である質の高い教育の美

## 3 PBLを用いたアプローチ

そこで、異文化理解や共生に関する意識を深める有効な教育手法として、先に述べたアクティブ・ラーニングがあります。このアクティブ・ラーニングの手法の一つであるPBL (Project Based Learning) (課題解決に向けた学習) は、目的の解決に向けた学習 / Problem Based Learning (問題解決に向けた学習) の業や大学、そしてそこに関わ

解決に向けた学習) ですが、教育の根幹にあるのは、学習を進めるために問題を使用するということ。自己主導であること・自己評価を行うこと・相互依存であること・があげられます。

例として本学で実施しているグローバルな視点や活動を伴うPBLでは、地域の課題や問題をテーマに、海外の企業や大学、そしてそこに関わ



長栄大学(台湾)との共同によるPBL (2019年度)

に加えて、人種や国境を越えた人同士がこれらのプロセスをおして、ひとつの社会で共に生きる姿勢や価値観を育成することにも役立っていると考えられます。

## 4 共生を築くための教育環境を創る

PBLは学習者の能力育成のみならず、ともに考え、共生を築く、教育の場でもあります。学生が学校の枠を超え、国内外の学生や地域・社会の人々と交流し、そこにある問題や課題を共に考えることで、お互いを知り、認め合い、各々が持つ多様な視点や意識を共有することができ、そして、そこから新しい知見や価値創造、社会問題の解決に繋げていくことが可能な教育手法です。

今後、地域の教育機関が果たす役割として、PBLをはじめとしたアクティブ・ラーニングを通じて、時代を担う人材の育成や共生にむけた教育の環境を創ることが重要ではないでしょうか。

(次回6月2日掲載予定)